

The Record by an Old Guy in the world of Virtual Reality Massively Multiplayer Online

# とあるおっさんの VRMMO活動記



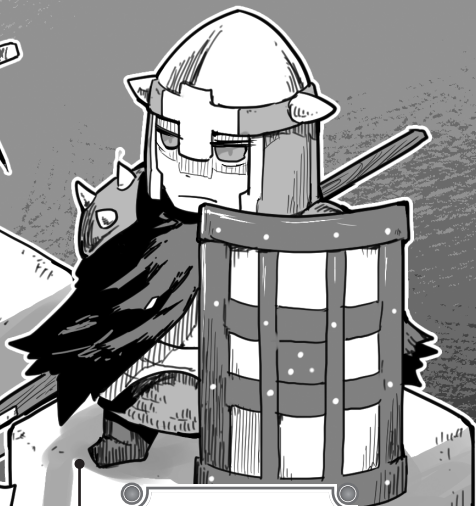
椎名ほわほわ  
Shiina Howahowa

33



### カザミネ

氷の魔大太刀を操る  
『スルーカラー』の  
凄腕アタッカー。



### レイジ

重鎧で身を固めた  
『スルーカラー』の  
頼れる男性タンカー。



### ミリー

『スルーカラー』の  
女性魔法使い。  
ツヴァイとは  
ギルド結成時からの  
付き合い。



### エリザヴェート

『スルーカラー』所属の  
金髪縦ロール系  
魔法少女。

### ???

750 階の試練を司る。  
天女のような装いで、  
10,000 体以上に  
分身することが  
できるらしい……?



### アース

本編の主人公。  
マイペースなプレイぶりで  
知人ぞ知る存在に。  
リアルでは38歳独身の  
会社員、田中大地。



### ツヴァイ

有力ギルド  
『スルーカラー』の  
リーダー。  
炎の魔剣持ち。



### グラッド

仲間と共に最強への  
道をひた走る  
トッププレイヤー。

VRMMOゲーム「ワンモア・フリーライフ・オンライン」のサービス終了が発表された後、アースこと自分は最後のイベントの舞台となる塔へ足を踏み入れ、試練の日々を過ごしている。

五〇〇階の試練を突破した翌日。

ログインして真っ先に塔に乗り込み、攻略再開。ここからは二五〇階で手に入れた指輪の能力で見つけた扉をみんな数階先に繋がるものに変換して一気に駆け上がる。さらに二〇階ごとの試練も全部パス。

今日は六〇〇階まで行く予定だ。二〇の倍数の階に下りないように調整しながら扉を変換しまくって、全速前進の勢いで進むのだ。

出てくるモンスターも手ごわい奴らが増えてきており、特にリッチが姿を見せ始めたのが厄介だ。こっちに感づけば、一気に手下のスケルトンとかワイトを召喚してくるという情報もあるため、ひたすら隠密プレイに徹し、戦闘を回避しまくっている。

この進み方は、死者の挑戦状を思い出させるな。何とも懐かしい。途中途中の階層でセーブをしながら、ひたすら六〇〇階を目指す。

ただ五五〇階を超えたあたりから、レンジャータイプのゴブリンが現れ始めた。

こいつらは他のモンスターに比べて、こちらの存在を嗅ぎつけやすいという能力を持っている。隠れて進みたい自分にとっては邪魔以外の何物でもない。

その分、戦闘力は同じ階層にいるモンスターよりやや劣るって話なんだが……ここまできるとモンスター側もパーティを組んでいるのが当たり前になってる。

しかも八匹以上で……プレイヤー側は六人までなんだが、モンスター側にはそういった制限はないようだ。

故に、見つければそいつらも同時に相手取らねばなくなる。

さらにそいつらは獲物を発見すると、近くにいるモンスターのパーティに角笛で知らせてしまうのだ。やめてくれと言いたくなる。

すでに一度見つかってしまい、角笛を吹かれるのを阻止できなかったがために、モンスターの集団を一人で相手取らねばなくなってしまった。

ただ、幸いにして挟み撃ちにされなかったので、そいつらをやや狭い通路まで引っ張ってから、範囲攻撃特性を持つ弓のアーツで押し潰した。

相手の数を利用させないための戦い方だ。真つ向勝負なんてやってられないからね……相手は二桁、こちらは一人なんだから。

囲まれて周囲から袋叩きにされると、凄まじい装備を身にまとっていても流石に厳しくなる。

その後は幸い見つかる事なく進み、今は五九〇階のセーブポイントにいる。

あと一〇階登れば今日の目標は達成だ。

ここに来るまでに一時間二七分か。扉の変換がなければ絶対に無理な攻略速度だな。休憩がてら掲示板も見てみると……なるほど、今の攻略平均は六〇〇階後半らしい。黒の塔だと——グラッド達が九八〇階に到達したとある。

白の塔は——ツヴァイ達が更新してるな。九二五階まで到達している。

他にも名のある連中がすでに九〇〇階台に到達済みか……黒の塔はグラッド達がぶっちぎりだが、白の方はまだ誰が最初に踏破するか分からない状態だな。ツヴァイ達の後ろに複数のパーティが迫ってきているし。

熾烈な上位陣のデッドヒートに対し、賭けも行われている。

と言つてもリアルマネーを賭ける危険なものじゃない。純粹に誰が最初に天辺に着くか、予想を皆で楽しむ穏やかなものだ。黒の塔はまあほぼ確定なので飛ばすとして、白の塔の予想は盛り上がっている。

人気トップはもちろんツヴァイ達だが、それでも三五%。かなり票が割れている。  
折角<sup>せうかく</sup>見つけたので、自分も投票。もちろんツヴァイ達にだ。こういうのはやっぱり知り合いを最<sup>ひい</sup>屑<sup>くせ</sup>しちゃうんだよな。彼らに勝ってほしい。

(さて、一息つけたし、自分は自分のために進まなければ。五〇〇階台の試験を全部飛ばしてきたから、六〇〇階の試験のレベルは上がっているはず……そろそろ行こう)

塔の攻略を再開し、扉を変換して先を急ぐ。

そうして数分後、自分は六〇〇階に到達した。

「来たね……君の話は聞いているよ……試験を伝えるよ」

六〇〇階の試験を担当するのは、眠そうなのを隠しもしない幼女だった。ゴスロリっぽいフリリの服を模した外見をしている。

「目の前に六つの宝箱が見えていると思う……宝箱の中には罠<sup>わな</sup>が仕掛けられている物がある……その罠が仕掛けられた宝箱を開けたら失敗……罠がない宝箱を開けると、扉が現れる……その扉を十回くぐれたら試験達成……ただし制限時間は五分……五分以内に罠のない宝箱を開けて扉を十回くぐる。それが試験……」

つまり、十回連続で罠のない宝箱を開けて脱出しろって事か。ただ、制限時間が厳しいな。五分を十で割ると……三十秒。

一部屋にかけられるのはたった三十秒か。これは相当にきついぞ。

「一応言っておくと……もしここまでの試験を飛ばさなかった場合、突破しなければならぬ扉の数は半分だった……だけど君は飛ばしてきたからペナルティとして扉の数が増えている……」

それでも一つの部屋にかけられるのは一分だけだろう？

どのみちきつい事には変わりはないじゃないか……だが、それでもここを突破しなければならぬ。覚悟を決めて、こういう時に使う道具を取り出す。

道具にゆがみなどはなし。

「宝箱に触ったら始まるよ……自分の好きなタイミングで始めてね……」

との事なので、六つの木製の宝箱を目で確認。外見に違いはなし、見た目で罠があるかどうかは流石に分からないな。

宝箱に触るまでは盗賊系統のスキルも無効化されているようで、何の反応もない。

ま、そりゃ当然か。

一度深呼吸をしてから宝箱の一つに触れた。それと同時に、盗賊系のスキルが起動した事を感じる。

(なるほど、罠がある箱は二つって感じだな。ならそれ以外を開けよう)

罠の反応がない箱を開けると正解だったようで、扉が現れる。



すぐに扉をくぐると、また六つの宝箱があるが……これも六つのうち四つに罠があるとスキルが教えてくれる。たぶん序盤は、スキルで簡単に看破できるんだろう。後半になればそうはいかないはず。だから今は少しでも時間の貯金を作る。

そのまま三つ目、四つ目まではスキルのみで見破る事ができた。

ただ、流石にそれはここまでだ。五つ目の部屋にある七つの宝箱からはスキルの反応がない。

これは妨害<sup>ぼうがい</sup>されているとみていいだろう。ここからは宝箱をスキルと今までの経験でチェックしていかなければならない。

(一つ目は……罠あり。二つ目、これもダメ。三つ目は……これも仕掛けがあるな、ダメだ)

罠を解除するのではなく見破ればいいので、一つ一つの宝箱にかける時間は短い。それでも複数調べれば相応の時間がかかってしまう、早く罠がない箱を見つけない——五つ目は何もない。箱を開けると扉が現れた。六つ目の部屋は……宝箱の数が八、さらに宝箱が鉄製になっている。

(これも罠あり、こっちもだ……こいつは……こいつも罠がある。するとこいつか!? こいつだ!)  
この六つ目の部屋はかなり手こずった。

宝箱を調べて六つ目でようやく罠なしの箱を発見。かなり時間を使ってしまった、急がなければ。しかし、そんな自分を笑うかのように、七つ目の部屋では宝箱の数が九個になっていた。

嘆きたくなるが、そんな時間すら惜しい。

宝箱に駆け寄って罠の有無を調べる。

幸い、この部屋は三つ目の宝箱が罠なしだった。

次の八つ目の部屋はついに宝箱の数が二桁の十個に。さらに宝箱が銀になっていた。

流石にここまで来れば分かるが、宝箱が豪華になるほどに罠の方もレベルアップしている。そう、存在をうまく隠すようになっていくのである。それでも、突破しなければならぬ。

(七五〇階に、すでにこつちを待ちわびている存在がいるからな)

もたついてはいられないのだ。

すぐに罠の有無を確かめるべく動き出す。

が、罠のない宝箱が見つからない。七つ目、八つ目……くそ、これはよりによって最後が当たりのパターンか！ 時間を目いっぱい使わされた。

序盤の貯金はもうとくに使い果たしたとみるべきだ。しかし、それを確認する暇<sup>ひま</sup>はない。

蹴破<sup>けいぶ</sup>するような勢いで九つ目の部屋へ。

宝箱の数はなんと十五。ここに来て箱を増やすペースを上げるとか悪辣<sup>あくれつ</sup>すぎるだろう。それでもやるしかないのだ。ここは六つ目の箱が当たりだった。

そうして最後の部屋に入ったわけだが……宝箱の数がなんと二十。さらに宝箱が金色に輝いている。だが、さらに厄介な要素が入ってきて——

(これ、宝箱の鍵を先に開けないと、罠があるかどうかの判別ができないように細工されている!?)

鍵開けを強要されるとは。それでも仕方がないのでやる——が、この鍵開け、かなり難度が高い。しかも強引にやったら絶対罠が発動するだろう。こういうのは連動していると考えておくべきだ。必死に取り組んだのだが、その声は三つ目の箱を調べている時に聞こえてきた。

「は……時間切れ。残念でした、またどうぞ……」

その言葉の直後、自分の足元が突如落とし穴となって落下させられた。

こうして、自分は五九五階まで戻されてしまったのである。くそう……

再び六〇〇階へ、自分は駆け足で戻ってきた。

「ただいまあ！」

「おかえり」

「ちよっと質問があるんだが。落ちた時のダメージで思い出した。自分は二〇階ごとにある試練を免除されているんじゃないかなかったか？ 七五〇階まで」

ところが今回の試練では、「試練を免除されていないのに試練を飛ばしてきた人」と同じ扱いを受けていた。これはおかしいだろう。

「あゝ、思い出してくれたようで何より。でもね……君、今回はその試練のある階層を飛ばしてきてたでしょ？ ちゃんと二〇階ごとに試練の部屋に入って、チョーカーを見せて、はい免除ですよという手続きを踏んでこなきゃダメなのよ」

「役所かここは……」

融通の利かなさっぷりがすごい。免除されてるんだから立ち寄りなくていいやと考えて、先を急ぐために飛ばしまくったのが仇となるとは。

「あゝ、それともう一つ。試練の難易度だけ一応手心は加えていたんだよ。免除されているからね」

——なぬ？ あの難易度で免除されているって……なら、手心が加えられていないとしたらどうなっていたんだ？

「たぶん、疑問に思っただろうから答えておくね。六部屋目から銀の箱になって、九部屋目から金の箱になってたよ。さらに箱の数も全部の部屋で五個増えてたね」

うげえ……それを考えれば十分手加減されてたわけだ。もしそうなら本当に本当に地獄だった金の宝箱の厄介さは十分理解させられたからね……

「だから、今後はちゃんと試練の部屋に入って免除の手続きを受けてね。手続きはすぐ終わるはずだから。こんな思いはもうしたくないでしょ？」

流石にそうさせてもらうよ……試練を飛ばすと先にある試練の難度が上がるのは情報として知っていたけど、実際に上げられると厳しいな。しかも手心を加えられてこれだったわけだし——同じ轍を踏まないためにも、今後はきちんと手続きを踏もう。

「了解、今後はそうするよ……」

「はい、こつちもまさか飛ばして進んでくるとは思ってたんですけどさ。ここで足止めさせてもらって、試練終了後に説明するつもりだったんだ」

じゃあ、突破していてもその後説明はきちんとしてくれたという事か。

そこはまだ良心的か……試練前に説明しないのは、一回痛い目を見てもらおうって事なんだろう。人にもよるが、痛い目を見ないと学ばないというパターンもあるからな。今回はたまたまで片付けて、反省も学びもしないってパターンもあるが。

「じゃあ疑問も解けたし、試練のやり直しを——」

「あ、もう突破したって事で良いよ。説明はちゃんと聞いてくれたし、最後の部屋までたどり着いていたし、十分でしょ」

良いのかそれで。

でもまあ、それで良いと言うのであればそれでいい。

この階層でセーブして終わりにするだけである。

「じゃーね」と、最後まで脱力気味なこの階層の試練の案内人の言葉を最後に、塔を出る。

時間は午後十一時十分前。これなら十分睡眠時間が取れるな。

明日からはきちんと二〇階ごとに免除の手続きを忘れないようにせねば。

と、ここでインフォメーションが点滅。

何事だろうと確認すると……黒の塔の踏破者が出たという告知だった。

当然踏破者はグラッドのパーティ。あちこちから「やつぱりあいつらか」「くそ、追いつけなかった」なんて声が聞こえてくる。さらにインフォメーションは今後踏破者がどうなるかを教えてくれた。

まず、塔の好きな階層にいつでも行けるようになる。これは最後の戦いに備えてスキル上げなどをするためだろう。

また、白の塔と黒の塔の間にある休息エリアの公共施設——宿屋なんかの事だ——の使用料が無料に。

さらに踏破者専用のショップが解放される。

そして、最後に踏破した塔とは別のもう一方に最初から挑みなおし、そつちも踏破すればさらなる恩恵が与えられると発表された。

グラッド達ならやれるかもしれないな。



まだ時間は十分残っているから、彼らの突破力なら……

(下手したら、彼らに抜かされそうだ……)

こちらが白の塔の天辺に到達する前に、グラッド達がクリアしてしまう可能性も十分ある。まあ、そうなたらそうなたで彼らに最大級の賛辞を送るしかないだろう。

周囲も、この話一色に染まっていた。

踏破者専用の店ってなんだよとか、これだけの優遇措置が得られるなら、明日からの塔攻略はもつと急がなければならないとかの声が次々と、聞きたくなくても入ってくる。

確かに、踏破者専用の店は気になるな……どんな品が並んでいるのか……その時、黒の塔から一つのパーティがやってくるのが目に入った。

「グラッド達だ！」

「最速踏破者のお出ましだぞ！」

そんなプレイヤー達の声が響き渡った。

だが、そんな声を聞いてもグラッドは喜ぶ様子はない。

むしろ当然の事であり、いちいち騒ぐなどとも言わんばかりの表情を浮かべている。一方で愛嬌のあるガルは「どーもどーも」と愛想よく手を振っていて、ゼラアは「ま、こんなものよ」と我慢げな表情を浮かべていた。

一番鼻高々としていたのは間違いないゼッド。こいつは一番分かりやすく「俺達が一番だ！」という笑みを浮かべていた。注目を浴びると嬉しくなるタイプなんだろうか？ まあ、無理もないけどな……最速踏破ってのはそれだけすごい事なわけで……そんな彼らに話しかけるプレイヤーは大勢いたが、グラッドは面倒だとばかりに付き合わない。

だが、ある一言には反応した。

「なあグラッド、黒の塔を制覇したって事は次は白の塔を制覇するのか？」

この質問を投げかけたプレイヤーだけにではなく、周囲の全員に聞こえるようにするためだろう。グラッドは大きく叫んだ。

「俺達は明日から白の塔の踏破を目指す！ 完全攻略を果たすために邪魔すんじゃねえ！」

その一言で、グラッド達を囲もうとしていたプレイヤー達の足が止まり、モーゼの海の道よろしく、全員が引いて道を作った。

その道をただ当然のように進むグラッド達。

彼らは宿屋の中に消えていった。

そうしてグラッド達がいなくなってから少し経った後に。

「やっぱり、あいつら完全攻略を目指すんだな」

「まさにトップに行くプレイヤーか……すげえとしか言いようがない」



「くそ、俺達もさっさと黒の塔を制覇するぞ！ これ以上グラッド達にばっかりでかい顔をさせてられるかよ！」

なんて言葉が飛び交った。グラッド達を褒める面子、俺達も完全攻略を目指してやると奮い立つ面子など……ますます周囲は騒がしくなった。

自分は……うん、白の塔だけでいいだろう。ただ、踏破した後、好きなところに行けるのなら、二五〇階のあの人もう一回戦いたいな。踏破した後に戦えば、また違った経験を得られるかもしれない。

さて、ではログアウトをと思ったところにウイスパーパーチャットが。

ツヴァイからか。何かあったかな？ とりあえず出てみる事にする。

【ツヴァイ、どうした？】

【さっきの黒の塔の踏破者が出たってお知らせは見えたか？】

【ああ、もちろん。というかグラッド達が帰還してきて、塔の間にある休息所は大騒ぎになってたよ】

ツヴァイ達も塔の中でインフォメーションを見たのだろう。

で、恐らく周囲に敵がいらない状態を作ったか、五階ごとにある休息所に入ったかで、こちらにウイスパーパーを飛ばしてきたのだ。

【そりゃ騒ぎになるよな……最速踏破っていうのはやっぱり目立つ成果だからな】

【グラッドはうつつとしそうにしてたが。あと、グラッドは白の塔の攻略を始めるって宣言していた。完全制覇を目指すんだろう】

ついでに、先ほどの件を含めてツヴァイにグラッド達の情報を伝えた。

【やっぱりあいづらは完全制覇を目指すか……もちろん、俺達も目指すけどな。白の塔、たぶん明日で俺達は登り切る。その後は黒の塔に挑戦するぜ】

【ツヴァイ達なら十分やれるだけの実力はあるもんな、行けるだろう】

ツヴァイ達も完全制覇を狙うか。

黒の塔は純粋な戦闘のみだから、むしろ厄介な仕掛けが多い白の塔を先に踏破したツヴァイ達の方が、グラッド達よりも先に完全制覇を成し遂げる可能性がある。

これは、ちよつと楽しくなってきたよ。どっちが先に完全制覇するのか、わくわくしてきた。

【ツヴァイ達ならやれるさ、応援しているよ】

【ああ、期待に応えてみせるさ。いつもの面子もやる気十分だしな】

自分の方も頑張らなきゃいけないが、このどちらが先に完全制覇するのか——それとも予想外のパーティがグラッドやツヴァイ達を押しつけて先に成し遂げるのか。明日からがまた楽しみだな。

## 2

翌日。自分は再び塔の攻略を目指す。今回も極力戦わない方法を取る。無論、戦った方が早い、戦うしかないという状況なら戦うが……それ以外はとにかく隠れてやり過ごすかサッサと逃げる。ただ、レンジャータイプのゴブリンに加えて、リッチが犬タイプのアンデッドを召喚するようになっていた。

この犬、鼻が利くので、一回見つかりそうになった。何とか逃げに徹して振り切ったが……より面倒になったな。でもリッチに捕捉されたら、アンデッド召喚で一氣に一对複数になってしまう。

そんな戦いをするなら逃げた方がはるかにマシである。

特にアンデッドに有効な火はオイルを消費しないと発動させられないし、光はどうあがいても自分には用意できない。

そのためどうしても進行速度は鈍る。今日からは進めても四〇階だろうな。これはもちろん扉を全部変換した上での数字。ここでソロである弱みが出た。

一人で何でもやらなければならないし、できない事があればただひたすらにその事から逃げるし

かない。もちろんその覚悟があるからこそ、いまだにソロなんだが。

(またゴブリンスカウト……くそ、これ以上は近づけないか)

五〇〇階台と比べて、ゴブリンスカウトの数が明らかに多い。

かといって下手に狙撃して殺せば、近くに敵対者がいると教えるのと同じ事だ……故に手を出せず、ひたすら逃げるだけだ。

それでも何とか進めており、またひとつ扉をくぐって先に進む。

しかし、ついにはつかつか扉前でうろろしているモンスターの集団に出くわしてしまった。三分ほど待つてみたが、扉の前から動く気配がない。

戦うしかないかと諦め、戦闘準備に入る。

周囲を先に確認し、さらに追加でやってくるモンスターの集団がいけない事を真つ先に確認。次にモンスターの集団の内容から、どう戦うかを考える。

今回はゴブリンスカウト二、オーガの両手斧持ちの戦士四、片手剣と盾持ちが三、オークメイジ三という編制だ。

メイジを担当しているのがオークというところが面倒だ。

オークはメイジであつても結構タフなんだよ……ゴブリンが魔法使いだつた場合は間違いなくゴブリンから倒すんだが。

そう考えるとゴブリンスカウトを狙つて数を減らしたいが、今度はすばしっこさがな……ゴブリンスカウトの敏捷性は決して甘く見て良いものじゃない。

掲示板情報ではこちらの首を狙ってくるタイプもいるという事で、ゴブリンと言えど油断すれば即死させられる危険な相手であるという認識を、プレイヤー全員が持っている。

よつて、最初の不意打ちがよつぽどううまくいかない限り、二匹いるゴブリンスカウトを同時に瞬殺とはいかない。

オーガはもう説明するまでもない……オーク以上の腕力と耐久力を持ち、その体軀から繰り出される武器のダメージは食らいたくない。

彼らを相手取つた時は、時間がかかるのは仕方ないだろう。

(やはり、ゴブリンスカウトを狙うしかない、か。同時に瞬殺は難しくても、どちらか一方だけでも落とせば……)

矢を番え、ゴブリンスカウト二体ができるだけ射線上に重なる時を待つ。

我慢には慣れている。我慢ができなきゃ社会で生きていく事なんかできない。

それからしばらく時間が過ぎ、ついに狙っていた瞬間がやってきた。悩む事なく矢を射る。チャンスなんて二回も三回もやってくるものじゃない。

放たれた四本の矢は、ゴブリンスカウトの頭部に一本、腹部に一本、腕に一本、そして外れて

オークメイジに流れ弾として命中した。

頭部に当たったゴブリンスカウトはそのまま絶命したが、もう一方は腕にしか当たらず、健在。追撃でさらに二本の矢を放ったが、ゴブリンスカウトがこちらの居場所を探し当てるのを妨害する事はできなかった。

命と引き換えに、こちらの居場所を仲間に教えたのだろう。

オーガの戦士達が自分に向かって一直線にやってくる。

敵ながらこれは見事というほかないな……オークメイジは完全にオーガの戦士達の陰に入ってしまったっており、直接狙う事は難しい。なので、オーガの戦士達の頭部を狙って矢を放つ。

が、オーガ達も盾や武器を使って矢を弾く。流石は六〇〇階以降のモンスター、地上にいる連中よりもはるかに厄介だ。

だからこそ、こうして戦わなければならない場合以外はひたすら逃げを打ってきたわけだが。それに、こちらはまだアーツを撃っていない。

だから……矢を一本番えてアーツを放つ。

「《プラストアロー》！」

久々に使う《プラストアロー》。このアーツは相手を吹き飛ばす事に長けている。

今の自分の能力、使っている武器。それらを考慮すれば、オーガが盾で防ごうとしても……ぶつ

飛ばせる。

「グガガガアアア！」

「オオオオオ！」

驚きながらもぶつ飛ばされ、地面に転がるオーガ達。

が、それを予想していたとばかりにオークメイジたちから魔法が飛んできた。

使われた魔法は、《フレイムスピア》《フリーズランス》《ライトニングバイク》。これらを大きな槍に変えて複数放ってきた。プレイヤーが習得できる魔法とはちよつと違う。

特に《ライトニングバイク》という魔法が危険だ。ダメージもさる事ながら弾速が速い。

それが一気に複数飛んでくるのである。自分は《ライトニングバイク》の相殺を諦め、回避しながら他の二つの魔法を相殺すべく矢を弓に番える。

数本の《ライトニングバイク》が体を掠めたが、これは装備品のおかげで体力をほぼ減らす事なく凌いだ。

相殺、そして反撃を兼ねた《ソニックハウンドアロー》を放つ。衝撃を伴った矢が飛ぶと、次々と《フレイムスピア》《フリーズランス》が砕け散って、一瞬の芸術を生み出して消えてゆく。

一方で《ソニックハウンドアロー》の方も、複数の魔法を相殺したが故に勢いを失い、オーガ達に届く前に地面に落ちた。



が、これは予想通り。次の矢はもう番えている。

次に自分が放ったのは《風牢弓》である。これも久しいな……命中したところに風の竜巻たつまきが現れて牢を成し、相手を拘束こうそくする。

その後頭上から相手を射貫く矢が降ってくるのである。三本矢を番えて放っていたので、オークメイジ一匹ずつに脳天を貫く矢が降る事になる。

「ピギヤアアア!」

「ヒゲッ!」

「ブイイイイ!」

三者三様の悲鳴を上げる。

だが、まだとどめを刺すには至らなかったようだ。

じゃあ追撃を——というタイミングで、オーク達が立ち上がりオーク達の壁となった。

これ以上やらせてなるものか、とオーク達のヘルメット越しに見える顔の一部から、その意思が窺うかがえる——

が、今壁になったとしても、オーク達の位置はもう十分に把握できている。ならば当然——

(角度よし、曲射!)

オーク達はまだ動けないだろうと判断しての曲射。三本の矢を番えて放ったこの一撃は——その

後聞こえてきたオーク達のさらなる悲鳴と反応の消失から、ちゃんと命中したようだ。

よし、計算ミスはなしだ。

一方オーク達は壁になったのにもかかわらずオーク達を曲射で仕留められた事で、激高したようだ。全員が一気に自分を押し潰さんと襲いかかってくる。

ここまでの戦いで自分を完全に射手だと考えているのだろう。が——ここからは【レガリオン】も持ち出して変則二刀流の構えを取る。

オーク側はこれを苦し紛れまぎと受け取ったのか、より突進速度を上げてくる。そして先陣を切ったオークが、自分に向かって両手斧を振り下ろす。

まさにこの一撃で縦に真つ二つにしてやると言わんばかりだ。

もちろん自分はそんな事は御免被ごめんうひるので左に軽くステップを踏んで小さく回避。その直後にオークの腕へと一撃を見舞みまう。

が、オークの腕を断ち切るには至らず。それなりに斬撃は通ったんだが、切り裂けなかった。

これは流石オークという事にしておこうか。

切りつけられたオークは横にごろりと転がり、その後ろから今度は二匹の両手斧を構えたオークが、自分を挟むように斜め上から両手斧を振り下ろしてくる。

これには一歩前に出て両手斧の横を激しく叩き、軌道をずらして対処。



さらに一歩踏み込んで、【八岐の月】の爪で自分の左側にいるオーガの首を狙う。しかし、これも決まらず。オーガは後ろに大きくのけぞり、爪の一撃を回避してみせたのだ。

だが、その体勢からさらに回避はできないだろう？

すかさず放った自分の追撃である【レガリオン】の一突きを、オーガはもろに食らう。

狙った場所は心臓あたりなんだが……だめか。オーガは後ろに飛びのいて胸を押さえてはいるが、今すぐ力尽きる様子はない。

外したか……いや、外されたのかもしれない。

いずれにしろ、こちらを侮あなづつてくれているうちに、あと一匹でもいいから減らしておきたかったんだが、そうはいかなかったらしい。

オーガの片手剣と盾持ちが軽く叫んだ。その叫びはうまく聞き取れなかったが、意思はたぶん……相手を侮るなどという事を伝えていたように感じられる。

事実、その一声？ があつた後にオーガ達は自分に突っ込んでくるのをやめて、一定距離を保っている。完全に警戒されてしまったな。

（向こうの、特に声を出したオーガはパワーだけじゃないという事か）

相手を認められる頭脳と、周囲を一声で従えるカリスマのようなものを持っているのだろう。扉前をガツチリ守っていた事といい……残りのオーガ軍団はそうそう簡単に倒させてはくれないよ

うだ。

オーガ軍団と、さらに数合打ち合う。この打ち合いで一匹ぐらい隙すきを作って、そこを突くという動きをしたかったのだが……両手斧持ちのオーガ達の踏み込みが浅くなっている。大振りもやめて斧の先で突くなど、隙が少なめな攻撃ばかりを繰り返してくる。

そして、ここに片手剣と盾を持っているオーガが参戦してきた。

片手剣と盾持ちが中央、左右に二匹ずつ両手斧持ちのオーガがいるという形だ。

さらにこいつら、少しずつではあるが自分の事を囲むような動きを見せている。今戦っている場所はそのこ広いため、オーガが展開できるスペースがあるのだ、困った事に。

完全に囲まれると流石にきついで、左右に展開する動きを見せる両手斧持ちのオーガを牽制けんせいしつつ、中央で積極的に切り込んでくるオーガの相手をしなければならぬ状況だ。

ああもう、手が足りない。そして、そういうやり方をしてくる向こうのオーガの司令塔は、よく分かっている。

チクチクとちよつかいをかけてくる両手斧持ちのオーガ。

そして、積極的に盾を前に出して視界を潰しつつ、自分を叩き切ろうとしてくる片手剣と盾を持つオーガ。

じりじりと向こうの望み通りの陣が出来上がっていく——ついにその時が来た。

片手剣と盾持ちのシールドバッシュを自分が受け止めて、動きが止まったその瞬間。オーガ達が動く。

左右に展開していた両手斧持ちのオーガが大きく振りかぶる。片手剣と盾持ちのオーガも片手剣を大きく振り上げて——自分の脳天に向かって振り下ろしてきた。

まさに必殺の一撃、このためにこの状況を作り上げたのだろう。

でもね、それを食らってあげるわけにはいかないんだ。

天井に残滓<sup>ざんし</sup>となってしまった【真同化<sup>まどうか</sup>】のアンカーを突き刺し、体を後ろ斜め上に引つ張り上げる。これによって相手の振り下ろし攻撃から逃れる事ができた。

すかさず弓に矢を番えて、先ほどの攻撃に唯一参加していない、指揮を執<sup>と</sup>っていると思われる個体の頭部を狙って放つ。

そのオーガは、え？ といった疑問の表情を浮かべながら矢を顔に受け、そして倒れた。

「グア!?」

「オ、オオ!」

残った五体のオーガは、手ごたえのなさにまず驚き——そして次に自分達の司令塔が殺された事に混乱したようだ。

それは戦いの場において致命的な隙となる。当然、逃す理由はない。彼らにも次々と矢のプレゼ

ントを送りつける。だが一匹だけ、立ち直り矢を防いだオーガがいた。片手剣と盾を持った個体だ。自分の仲間が殺された事に激高したようで非常に大きな声を上げる。その後、矢を撃ち終えて地面に着地した自分に向かって突進してきた。

その突進を、自分は《大跳躍<sup>だいちょうやく</sup>》で飛び越え、後ろに回って【レガリオン】で首を刎<sup>は</sup>ねた。憤怒<sup>ふんぬ</sup>の形相のまま、オーガの頭がゆっくりと転がり、そして消えた。

(パーティで連携してくるモンスターは何度も見たが……やっぱり面倒になるなあ。この先はもっと増えそうだ……)

ああやだやだ、なんて思いながら扉を変化させ、中に入る。これで六四〇階に到達できた。時間的に今日はここまで。

先ほどの戦闘にかかった時間はさほどでもないけど、隠れていた時間が長かったため今日は時間切れとなってしまった。

でも、今後はこういう進み方がメインとなる。

どれぐらいの進行速度になるのかが分かったので良しとしよう。

(残されている時間はまだまだあるし、焦<sup>あせ</sup>るような状況にはない。だからと言ってダラダラして良いわけじゃないけどさ……明日も確実に前に進もう)

と考えていたこのタイミングでインフォメーションが。もしかして、と思って見てみると、ツ

ヴァイ達のパーティが白の塔を踏破したという告知が流れていた。昨日言っていた通り、今日で盛り切ったのか。

でも、ツヴァイ達は今度は黒の塔の踏破を目指すと言っていたからな。休む間もなく挑み始めるんだらう。

（さて、完全制覇はどちらが先かな？）

一日遅れたツヴァイ側だが、黒の塔はとにかく戦闘オンリーで良い。一方で白の塔は力押しだけでは通じない。

これがどう運命を分けるかだな……グラッド達が白の塔の試練にちょっとしたでも躓けば、ツヴァイ達が追い抜くのは難しい話ではない。展開は予想しづらいだろう。

と、それはそれとして。自分は自分で白の塔を登り切らなきゃだめだ。まだまだ先があるし、特に七五〇階の試練はどんなものが来るか分からない。彼らの事にばかり気を取られてはいけいな。

（明日もまたがんばらう）

そうしてログアウトした。

### 3

そんな塔の攻略が数日続き、そして、自分は七〇〇階に到達した。

「ようこそ、七〇〇階へ。ここまで来られたあなた達……ごめんなさい、あなただったわね。まずはお見事と言っておきます。ここまで来られただけでも、あなたがこの世界で上位に位置する猛者なのは間違いありません。ですが、この先に進めるのはその中でもさらに強く、諦めない人のみ。試練を始めましょう」

七〇〇階の試練の主は、これまた幼い女の子の外見をしていた。

だが、その喋り方は淑女。そのアンバランスさがなかなか面白い。そんな彼女は何を試練として出してくるのか。

「——ですがその前に言わせてください。まさかこの階層まで、試練によって強制的にパーティを組まされた時以外は単独で登ってくる人物がいるとは思っていませんでした。普段は単独でも、難関に挑む時はパーティを組むのが基本のはず。人は手を取り合い、困難に立ち向かって生きてきた。なのに、あなたはその在り方から完全に逸脱している。無論、装備などの入手、製作等で他者

の手を借りているのでしょうか……」

なるほど、ソロ到達者としては自分が一番進んでいるって事になるのか。そしてこの反応……自分も立派に「他の人から見たら異常なプレイヤー」の一人なんだろうな。

「気を悪くされたら申し訳ないのですが、あなたの動きは他の方々よりも少々多めに記録させていただいてます。正直に申し上げて、この階層まで、たった一人で登ってくる事など不可能だと私達は考えていましたので。ですが、あなたの行動を見るたびに、私達の予想は常に裏切られ続けてきました」

別に、そんな事ぐらいで腹は立てない。こっちは別にやましい事は一切していないんだから。

「それぐらいかまいませんよ。好きなだけチェックしてください。やましい事も、後ろめたい事も何一つやってませんから」

微笑みながらそう口にする、なぜかため息をつかれてしまった。

「あなたのおっしゃる通り、あなたは一切おかしい事をしていないと分かっています。だから私達には理解ができません。この塔の踏破はパーティを組んでなお、厳しい道程にしているはずなんです。特に五〇〇階以降は顕著に。しかし、あなたは今ここにいます。たった一人でこの塔をここまで登ってきた人物がいる。正直に申し上げます、驚異的だ」と

何とも、驚愕と、敬意と、そして理解できないという感情が入り混じったお言葉だなあ。

それでもずっとこのスタイルでこの世界を旅してきたから、このやり方が、この進み方が自分だ。そうとしか言いようがない。

「その脅威的な姿を、ここでも示してただけののでしょうか……楽しみでもあり、恐ろしくもあります。では、長くなってしまいました但し試練を発表いたします。あなたへの試練は……ドラゴンとの一騎打ちです。ドラゴンを打ち倒し、この先に進む権利があると示してください」

その言葉と共に、一匹のブルー・ドラゴンが奥からゆつくりと姿を見せた。

さらに部屋自体が轟音を上げて広がっていく。部屋が拡張を止めた時……広さは東京ドーム並みのサイズまで大きくなっていた。

「このドラゴンは塔の主によって生み出された存在……外に生きているドラゴンとは全くの別物です。ですが、強さは大差ありません。あなたが準備を整えたら、戦闘開始となります」

——ドラゴンとの一騎打ちか。懐かしいな……ずっと前に妖精国でやって以来か。だが、ドラゴンが立ちほだかろうとも自分は前に進む。それを、結果をもって証明しなければ。

手早く準備を整え、戦闘態勢を取る——前に一礼。

自分が礼をする、ドラゴンが少々驚いたような表情になったが、向こうも軽く頭を下げてきた。その後は互いに戦闘態勢に入って、にらみ合う形となる。

「それではよろしいですね？ 試練開始です！」

この階の担当者の声を合図に、自分とドラゴンはお互いに動き出した。向こうはまず空に浮かんでこちらを見ている。まずは様子見といったところか……こちらはもちろん弓による攻撃を真正面から行う。相手に攻撃が刺さるか否かを見るためだ。かつての戦いのように、鱗に対して攻撃が刺さらなければ、戦い方を考えなければならないのだから。

三本矢を番えて、ドラゴンに向けて放つ。最初はあえて受ける、そう考えていたのだが——ドラゴンはこの矢を、空中で急速に横にスライドする形で回避した。

対空状態からの急速な移動を可能としたのは恐らくドラゴンの魔法の力なんだろうが、重要なのはそこじゃない。ドラゴンが、回避行動を取ったのだ。

（つまり、あの矢を食らいたくない。自分の鱗では防ぎきれないと吐露したのと同じだ）

ならば、口を開けたところに【強化オイル】をぶち込んで内側からダメージを与えるしかなかったあの時とはすべての面で違う。真っ向勝負で十分やれるというのであれば、普段通りの動きでいい。

と、今度はこちらの番だとばかりにドラゴンが口を開く。ブレスを放つつもりだろう。阻止してもいいのだが——

（ここは一回見に徹するか。相手のブレスの特性を最初に見ておくというのは決して悪い事じゃない）

少し距離を取りつつ、ブレスが吐かれるタイミングを窺う。ドラゴンの喉の奥が青く発光し始め、徐々に圧を感じるようになる。そして発射されると同時に、自分は横に大きく飛んで回避した。

（まるでこちらに飛んでくる渦潮だな。もろに食らえばあの渦に巻き込まれて身動きが取れなくなり、あとはやられるがままになると見て良いな。それに渦の中に光を反射する何かがいくつもあった。ウォーターカッターみたいな水で作られた刃が交じっているのか）

相手のブレスも見られた。あとは近接戦闘能力、魔法による遠近攻撃能力がどれぐらいあるかだが、それは戦いの最中で見切っていくほかない。

再び矢を射かけるが、今度は魔法障壁つばい壁を生み出して矢を防ぐ——いや、防ぎきれずに貫通した。

ただ、それでもやはり勢いは殺されるため、鱗に当たった矢は弾き返された。

ドラゴンからの攻撃はもっぱら魔法によるものばかりになった。水、氷系の魔法をタイミングをずらしながらばらまいてくるのである。

一方でかなり至近距離まで寄っても、噛みついたり爪を用いた格闘戦はせず、すぐさま空中に逃げるのだ。あれだけ太い爪、立派な歯があるというのに……なぜだろうか？

（むー、魔法障壁による矢の威力軽減が面倒だなあ。もちろん向こうからしてみれば、直撃なんて御免被るって話なんだから、障壁を解くはずもないんだけど）

接近戦を仕掛けるとすぐに逃げるんだよね……徹底的に遠距離戦のみで戦いたいというのが向この考えらしい。

もちろん、この行動すべてが釣りという可能性はある。ひたすら焦らして、こちらが突っ込んできたところに最高の一撃をカウンターで放つっていうパターンだな。自分もやった事があるから、その可能性は常に考慮している。

かといってこのまま遠距離戦に付き合い続けるのもなあ。相手の手のひらの上で動かされている気分になるから、ちょっと嫌なんだよね。

ましてや相手は魔法障壁でこちらの矢の威力を常に下げている状態だ。このまま攻撃を続けて魔力消費を加速させてガス欠を狙うつても、相手がドラゴンじゃなきゃありなだけ……

(ドラゴンの魔力量なんて測る機会なかったもんねえ。せめてデータがあれば、枯渴<sup>こかつ</sup>を狙うか他の手段を考えるかをすぐに決められるんだけど)

嘆いても仕方がないので、とにかく今は攻撃する。相手の魔法攻撃を相殺しつつ、こちらも遠慮なしに【八岐の月】で魔法障壁に矢をぶち込み続ける。

それにしてもひたすら滞空しながら魔法を引き撃ちしてくる。これ、インファイト特化のプレイヤーだと何もうできないぞ？

ここまで極端な戦法をドラゴンが取るところに、どうしても違和感を覚えてしまう。

(魔法障壁をどうにか破るしかなさそうだ……なら、複数方向からの射撃で揺さぶってみるか)

真正面から撃ち合っているのはキリがない可能性があるんで、こちらも動く事にする。曲射やアーツを交えて、前面だけでなく上から襲いかかる攻撃も増やしてみたのである。

その結果、ドラゴンが展開している魔法障壁は常時展開されている球体であり、どこを狙い撃つても威力は軽減される事を知った。

だが、逆にどの角度から撃ち込んでも、完ぺきに魔法障壁が矢の勢いを殺す事がないのもまた事実だった。

勢いこそ失われるが、矢自体はブルー・ドラゴンの体に届いているのである。と、なれば……有効なアーツが存在する。使うのは久しぶりになるが……あれを使う事にしよう。

(相手の遠距離戦にまだ付き合うという風に見せかけよう。あのアーツは決まるまでバレない事が一番大事だから……)

できるだけ、ドラゴンの目に届きにくい場所を狙って矢を放つ。

使うのは《七つの洛星<sup>ろくせい</sup>》。七本の矢を三十秒以内にすべて外さずに当てる事が成功条件のアーツだが、今まで相当な数をドラゴンに射かけているので、向こうが気が付かない可能性は十分にあると踏んで発動した。

一本一本を、今までと変わらないように、素知らぬ顔でドラゴンに当てていく。



四本、まだバレていない。五本、六本……バレていないな。

次が最後と、七本目を構えた時だ。ここでバレた。

ドラゴンも違和感を覚えたのか、視線を自身の体の一部に向けたのだ。そこには、浅くではあるが突き立ったまま消えていない矢が存在していた。それを見たたん、ドラゴンは魔法攻撃をやめて、高速かつ軌道が読みにくい飛び方をし始めたのだ。

（この行動、《七つの洛星》を知っているな!? 最後の一本を当てられまいとする行動としか思えない）

不規則に動きまぐるため、狙いが定まらない。

しかし、三十秒というタイムリミットは迫ってきている。

なのでもうこれは相手の動きを予測して矢を放つほかない。読みが外れればアーツは失敗になるが……このまま放たなければどのみち失敗だ。

ならば行動するほかない。

三、二、一、そこ！

放った七本目は、ドラゴンの翼の先にぎりぎり命中した。条件が整った事により《七つの洛星》が起動する。

どこからともなく七つの隕石がドラゴンに落ちてくる。

それらを回避しようとさらにドラゴンは動くが、ここで自分はドラゴンの顔を狙った射撃を行う。障壁により勢いは軽減されるが、それでも目などに当たれば痛いでは済まないはず。

事実、ドラゴンはこの攻撃を嫌がった。

目などにだけは被弾しないように動いたわけだが……そうすればもちろん、動きは鈍る。そこに七つの隕石がドラゴンを押し潰さんと襲いかかった。障壁が発動したのは見えたのだが、流石に矢と隕石では質量の差が違いすぎる。

大して軽減されなかった——ように見える。

派手な音と共に、隕石はドラゴンを容赦なく地面に叩き落とした。しかし、これで屈するドラゴンでもなかった。

叩き落された直後こそ動かなかったが、数秒後には落ちてきた隕石を無理やり振り払って起き上がってくる。その時の勢いで、いくつかの隕石が地面を転がってから消える。

（よし、明確なダメージ蓄積を確認）

複数箇所から結構な量の出血が認められるし、隕石が命中したと思われる部分の鱗はひび割れていたり、完全に破損していたりした。

これで全くダメージを受けていないとしたら詐欺も良いところである。その分、こちらに向けてくる敵意というか殺気も跳ね上がっているけれど。

（今さらこの程度の殺気に怯える事はない。と言っておいてなんだが、ドラゴンの殺気に向けられても動じないってどうなのよ自分。これだからあれこれ試練の担当者に言われてしまうんじゃないだろうか）

とにかく、まずは大きな一手を相手に叩き込む事ができた。ここからが第二ラウンド開始というところだろう。

向こうももう引き撃ちばかりしてくる事はないはずだ。同じ行動を取れば、再び《七つの洛星》をぶち込まれかねないんだから。

まあ、クールタイムがあるからしばらくは使えないんだけど……さて、ドラゴンはここからどう動くかな？

#### 4

ドラゴンは、変わらずこちらに殺意を向けてくるが……妙だな。殺意の中に敬意が混ざったような雰囲気がある。単純に自分の勘違いか？

いや、長く「ワンモア」をやってきて、この手の感覚の読み取りを違えた事はまずない——もし

かしてこれ、汝は敵として認めるにふさわしい、みたいな感じか？

最初は一方的に倒せる、敵として認識するに値しない存在だったのかもしれない。

しかし、《七つの洛星》を受けて明確なダメージを被った。その事で目の前にいる人間は、遊び半分で相対していい存在ではない。そう捉えたのかもしれない。

「グルル……ウオオオオオオオ！」

と、ここでドラゴンが咆哮を上げ、自身を中心に水色の球形の膜を張る。が、ただの膜ではない。表面に海のように波が立っているのが見えるからだ。そして、ドラゴンはその膜を維持したまま今度は先ほどとは違って突撃してきた。

「おおっと!?」

何せドラゴンではかい。さらにそのドラゴンが張っている膜はさらに大きい。

なので回避するとなるとかなり大きく、素早く動かなければならない。

その回避行動のついでに、自分は一本の鉄の矢をドラゴンを包んでいる膜に軽く投げつけてみた。あの膜がどんな意味を持つのかを調べるには、何かをぶつけてみるのが一番手っ取り早いと考えたからだ。

その結果……膜にぶつかった——違う。それは正しい表現ではない。

膜に触れようとした鉄の矢は、表面の波に触れるや否や……会社にある、水圧で硬い金属を切る

ためのウォータージェットを使ったかのように、鋭く切り刻まれたのである。

（あの波一つ一つが鋭い水の刃って事か！　で、そんなものをもろに食らったら、一瞬で下手なスプラッター映画よりグロい死体が出来上がりそうだな!?　本気でこちらを倒しに来たって事だな）  
ウォータージェットというのはたとえてもあって、それぐらいすっぱり切れたという事だ。

とにかく、あの膜を何とかしないとどうしようもない。

ドラゴンが再び突進の準備を整える前に、自分は三本の矢を番えて放つ。アーツこそ使っていないが、本気で射殺するための射撃だったのだが……膜は容易く矢を防いだ。

いや、厳密には水の膜の波が矢の勢いを殺し、膜そのものが受け流すような役割を担ったと言っべきか。

（トップクラスに厄介だなこれ!?　近距離は危険すぎて、遠距離は軽減する。他のプレイヤーはこんな試練をすでに乗り越えているのか?）

魔法障壁に水の膜と、自分を包んで防御を維持しながら攻撃能力も非常に高い。

自分の手持ちでは——あれぐらいしか有効打がないような気がする。

もらったばかりの能力をもう使うのも気が引けるが……技術は使ってこそ意味があるとも言っし、いいか。

もう一回ドラゴンの突進を何とか回避した自分は、五〇〇階の試練を突破した時にもらった【瞑

想のチョーカー】にある能力の一つ、《ジェルスパーク》を使用する。

五〇〇階で散々苦戦させられた雷撃入りの水球である。

あのブルー・ドラゴンの水の膜に触れても、電撃ならば通るはず。もちろん、あの膜が超純水——不純物を取り除いた絶縁体だったら効かないが……

三個浮かんだ《ジェルスパーク》を、三回目のブルー・ドラゴンの突進に合わせて放つ。何せ的自己はでかい。

何なら発射せずに、ドラゴンが突進してくるライン上に置いておくだけでもいいほどだ。

さて、あとは効いてくれるかどうかだが……《ジェルスパーク》が当たったと同時に、膜の表面に無数の雷撃が走った。

それだけで終わった。ドラゴンの絶叫なども聞こえてこない。

こりや不発か?　そう思ったのだが、ポン!　と軽い音と共に水の膜が破裂した。

なるほど、雷系のダメージがあつた膜にいくと、割れるっていう弱点があつたんだ。自分は単純に、水に通じるなら雷か?　という軽いイメージだったんだが……

何にせよ、あの膜がないのであれば!

すかさず五本の矢を番えて放つ。ドラゴンもこちらの攻撃に気が付いて回避行動を取ったが、五本中三本がドラゴンの鱗を貫いて体に突き立った。

かなり深く刺さり、ドラゴンの表情がゆがむ。

ただ、刺さった場所が胴体部分だったためか、悲鳴を上げさせるほどのダメージはなかったらしい。

とはいえ有効打には違いない。

再び自分は矢を番えて放つが、流石にそれは食らいたくないとはかりに再び膜を展開するブルー・ドラゴン。

ふむ、あの膜を展開するのに大体三十秒ぐらい？ で、またあの膜をはがすために雷属性の魔法を膜に当てなきゃいけない、と。

こっちの雷系魔法は《ジェルスパーク》しかない。うまくやらないと、次は当たってくれないだろうな。

まあ、それは向こうも同じ。膜を張ったは良いが、むやみに突進すれば雷撃を食らって守りが解ける。

膜が解ければ己の鱗を破る矢が飛んでくる。

そうなければいつかは自分が倒される。故にあの雷撃を受けるわけにはいかない——そうならば当然、にらみ合いになってしまう。

お互いにちよつとした魔法や矢は撃ち合うが……先ほどまでの戦いから完全に変わって、停滞し

てしまった。

お互いの手に対してカウンターが存在するため、うかつに仕掛けられない。

自分も向こうも、ここからどう有利な状況に持っていくのかを考える。

しかし、ここで待ったがかかった。

かけたのは当然この七〇〇階の試練の管理者だ。自分も、ドラゴンも彼女を見る。

「そこまでです。これ以上はお互いが見合つて動かないだけになると判断しました。それに、戦いぶりからあなたはこの先に進むに値する人物であると、判断できました。よって、七〇〇階の試練を突破します」

あれ、合格？ てつきりこのブルー・ドラゴンを倒さなければダメだって判断されると思つていたんだが。

「やっぱりあなたは色々とおかしい。上からの指示に従つて、普通より二回りほどレベルを上げた子を投入したわけですが……なぜここまでソロでやるんですか。水の膜を割った《ジェルスパーク》、それを伝授されているのもおかしいですし……このまま続ければ、きつとあなたは時間はかかれどあの子を倒してしまうでしょう。それは困ります。今後の試練でもあの子には頑張ってもらわなければならないのですから」

なるほど、試験に重要な役割を担うドラゴンの消耗しょうこうを嫌つたというのもあるのか。確かに自分の

矢はドラゴンの鱗を貫ける。

なので、戦いの展開によつては、自分がドラゴンにトドメを刺す結末もありうる。が、それをされると今後の試練に響くからやめてくれつつ事ね……まあ、こちらは突破できれば文句はないよ。殺気を完全になくしたドラゴンが自分の近くに顔を寄せてから軽く頭を下げてきたので、自分も一礼。お互いに敬意を払った。

だが、正直あそこでストップがかからずに戦い続けたら、自分は勝てただろうか？

正直、過去に戦ったあのグリーン・ドラゴンの長老とは比べる事自体失礼になるぐらい強かった。こちらが負けた可能性も十分にある。

「正直、なぜそれができるのかわけが分かりません……いくら殺気を収めたと言っても相手はドラゴンですのに……ここに来た皆さんの大半は、突破したしないにかかわらず、戦いの後でもドラゴンに怯えていましたのに。しかもパーティを組まず、ソロという心細さもあるはず……」

小声で言ってるようだけど、聞こえているからねー。

あと、ドラゴン以上の化け物と戦った事がある上に、ソロにもう完全に慣れているから心細さなんてものはハナからない。

それも、こうやってドラゴンを目の前にして敬意を払い合える理由じゃないかな……そもそも、レッド・ドラゴンの王様と直接話した事も、一回や二回じゃないからね。

「まあ、その、なんと言いますか。私はこの塔の外での冒険でも、周囲の人からお前はおかしいと言われるような事を多々やってきてしまっていますので」

自分の返答を聞いて、口にした事を聞かれていたと察し、顔を覆う管理者。

何も言わない方が良かったかな……意地悪をしたつもりはなかったんだけど。

「はあ。でも、理解できました。きつと私達の主が願っている事を叶えてくれるのは、あなたのような方なのでしょう。残り三〇〇階ですが、あなたなら登り切れると信じています。ソロで、ね」

その言葉と共に、球体の記録装置が姿を現した。

あとはあの装置に触れば、今日の塔攻略はおしまいとなる。

「個人的に応援させていただきますよ。私にはあなたに渡せるような力はありませんが……応援ぐらいはできますので。それでは、記録だけはお忘れになりませんように」

そんな彼女とドラゴンの目の前で記録し、塔を出る。

出る直前まで、管理者の彼女と、ブルー・ドラゴンが手を振ってくれていた。

どうやら彼女だけでなく、ドラゴンも自分を応援してくれるようだ。

ならあと三〇〇階、期限内に必ず登り切らなければ格好がつかないな。

頑張らなきゃ。

七〇〇階を突破した翌日。今日も頑張って進みましょうと思っていたんだが……ゲーム内のメッセージが届いていた。

差出人は、グラッド？ これはまた珍しい人物から送られてきているな。何かあったか？

『二五〇階の試練について聞きてえ事がある。時間がある時にウイスパアを送ってくれ』

——もうそこまで行ったのか。早すぎんだろ、あいつらの攻略進行速度。

しかし、二五〇階で詰まったのか？

二五〇階といえば、あのスネークソードを使う女騎士だったかな、試練の内容は。

とりあえずウイスパアの申請を送ってみるか。

二分ぐらい後、繋がった。

【アースか。ウイスパアをくれたという事は、メッセージを読んだって事だな？】

【ああ……試練について聞きたい事ってのはなんだい？】

そして、グラッドの返答を待つ。が、なかなか返ってこない。

グラッドにしては珍しいな、なんとも……歯切れが悪いとでも表現すべきか？ いくつかの声が

聞こえるんだが、ああでもない、こうでもないという感じがする。

結局、まともな返答が来たのは数分後、たぶん三分ぐらいはかかっていたんじゃないだろうか？

【確認してえ。二五〇階の試練で、俺達は負けた。そして、何回も挑んだがまだ突破できねえ。そんな時、パーティの一人であるゼッドが叫びやがった。「こんな相手に勝てる奴がいるのかよ」とな。そこに向こうからの返答があった。「本気の私と戦って、勝った男が一人いる。あの方はたった一人で、くじける事なく挑み続けて、そして私に勝ててみせた」とな。その男つてのは、てめえの事か？ アース】

なるほど。そんな事を言われたから、可能性があることちに確認に来たのか……グラッド達なら言いふらさないだろうし、いいか。

【ああ、ソロで挑んでかなり時間はかかったけど、最終的に勝ったのは事実だよ。ただ、自分の時はソロだったからなあ……もしかするとグラッド達はパーティかつ黒の塔を攻略した後だから、試練のボスに大幅な強化ブーストがかかっている可能性があるけど】

片方の塔をクリアした以上、白の塔の試練の難度が跳ね上がっている……俗に言う二周目難易度になっている可能性がある。